

安保法施行 私たちは

NOの声 参院選へつなぐ

憲法に反するこの批判や疑念が解消されないまま、安全保障関連法が29日に施行された。各地では抗議の訴えが改めて広がり、今夏の参院選に思いをつなげようとする若者が街頭に集った。日々の暮らしのなかで、日本の安保政策とどう向き合っていくか。社会が問われている。

▼1面参照



安保法施行に抗議の声を上げるひとたち
29日午後、大阪・梅田、井手まゆみの撮影

社会の課題 市民として声あげる

就活の学生



北海道、東京、名古屋、大阪、広島、福岡……。安保法が国会で成立した昨年9月から約半年。再び街頭に多くの市民らが集った。

約3万7千人(主催者発表)が集った国会前。集会が始まると、「民主主義を取り戻せ」などと書かれたプラカードを持つ人たちが歩道が埋まった。「参院選に向けた野党の結果が進んでいる。投票に行こう」。学生団体などと集会を主催した「学生の会」の山口二郎

大阪・梅田に集まった人たちの中に、佐々木大地さん(28)。「兵庫県西宮市」の姿があった。社会学を専攻するかわら、来年春に向けて就職活動をする大学生だ。

「今の政治はおかしい」と思っている声を上げることに何の意味があるのだろうか。安保法をめぐる国会審議が山場を迎えていた昨年夏、国会前や各地の街頭で抗議する学生らの姿を冷やかに見ていた。「戦争を知らない僕たちの世代が『戦争が起きる』と心配しても現実味が無い」とも感じていた。一方で、同じ世代の人たちと政治の話をしたことがない自分がいた。街頭で声を上げる学生らのツイッターを見ると、安保法にとまらず、社会が抱える課題について議論していた。就職難、ブラック企業、ハイトスビーチ(差別的憎悪表現)……。一瞥せ、目を向けてこなかったんだ。素直にそう思った。

今月6日、初めて大阪・ミナミでの抗議行動を見に出かけた。「就活中なのにかな」と心は揺れたが、「市民としてここにいなければ」と思い直した。そして、フェイスブックに「偉そうに評論家やって上から目線で冷笑していた。観客席に身を返して。もうやめにしてさう」とツイートした。会社説明会に週3回行っているが、こたからは周りの人と意見を交わすつもりでいる。社会で生きて、自分の考えを

法大教授はこう訴えた。大阪・梅田のJR大阪駅周辺で学生団体「SEALDs KANSAI」が主催した抗議行動。中心メンバーの塩田潤さん(22)神戸大2年11月もこう呼びかけた。「夏には選挙があります。私たちの生活を守るのか、生活を破壊し続ける政治を続けるのかの選挙です」。その場には母須グループのメンバーの姿も。近

されたなどとして、関西の市民グループは29日、国に損害賠償や同法に基づく自衛隊の活動差し止めを求める訴訟を大阪地裁に起こす方針を明らかにした。5月末の提訴をめざし、近畿6府県を中心に原告を募

としている。原告代理人に就く冠木克彦弁護士(大阪弁護士会)によると、法施行で生じる精神的苦痛への慰謝料として各1万円の支払いを求めるという。問い合わせは冠木克彦法律事務所(06・6315・1517)へ。

安保法違憲訴訟 関西で原告募る

安保法によって憲法が保障する「平和のうちに生きる権利」を侵害

くでスピーチを聴いていたの手の中にある」。富山市のJR富山駅前では弁護士らがおかしいことはわかっている。いつか廃止できることを信じて反対と言いつつ続けた」と語気を強めた。

京都市役所前でマイクを握った主婦の伊藤恵子さん(52)は「まだ憲法は私たちが街頭に響いた。

3/30 日曜日